

夢を編む その20

「おまえたちの時世は過ぎた。世の中は進んだのだ」

新美南吉のおじいさんのランプを読んで

高橋 秀夫

「いのちを繋げた火」

人類の発展は、火の利用に負うところが大きい。火の利用の痕跡として最古のものは160万年前だそう。物質は固体(地)、気体(空気)、液体(水)そして、プラズマ(火)の四態よって成り立っている。習った。三つの要素に火が追加されたところから人類は飛躍的にいのちを繋げ、発展してきた。あかりとして、暖をとる、調理する熱源として。

では、人はどのようにして火を手に入れたのか。プロメテウスが神から盗んだのか。イザナギとイザナミの「神生み」神話の最後に生んだカグツチ神がもたらしたのか。

山火事や落雷で燃え上がる火はまさに脅威であるが逃げ惑う動物を尻目に人はその火を持ち帰り、絶やさず灯した。人類は牙もない、幹に毒もない、打ち倒す強力(ごうりき)もないし、空飛ぶ翼もない。生き残るために火を手に入れた。火にあぶられた肉や木の根はいのちを倍以上にし、牙の代わりに武器を作り、言葉を持ち、学習の知恵を覚えて生物群の中で生き延びてきた。

「闇をひらく光り」

焚き火から松明として持ち運び、火を起す技を発見し、煙のない火をもずんずん発見していく。

植物から油をとる、麻やばねからろうそくを作り、消えぬよう紙を貼り行灯となり、石油によるランプとなり、明かりを個人で所有する世となる。

「おじいさんのランプ」は、この明治の文明開化、近代化の波の中で翻弄されていたランプ屋の姿の話である。

身寄りもなく、貧しい少年であった主人公の己の助は人力車の後押しの仕事で町に行き、ランプの光りで灯される町の明るさに感動して、薄暗い自分の村を明るくしたいと発起し、ランプ売りを始める。そして、ランプ屋で身を立って幸せを掴むストーリーですが、物語はやがて、近代化の申し子電気が登場でランプ屋は時代遅れの生業と悟り、やめていくという話である。

物語の背景である近代化という「豊かさ」のなかに「脅威」というもうひとつの顔が現れたことに人は気がつかなかった。ランプから電燈の時代の到来である。明かりが管理される世となっていく。

このあかりの変化は足早だ。

新美南吉の「おじいさんのランプ」を読んだら思った。

くらしの移り変わりは人ひとりの寿命の時間ほどの中で進んでいる。近代化というもののはしみじみと微かなあかりの中で闇を闇として意識し、目をこらして見つけたあかりの美しさ、そういう心性も町や家々が明るくなればなるほど忘れ去られ、消えていったのでしよう。

「おまえたちの時世は過ぎた。世の中は進んだのだ」と叫んでランプを割っていく己の助(主人公)の時間を断つ不連続性の行為がどんどん明るくなる現代の「豊かな生活への警鐘のようにも聞こえた」。

「月夜の堂」

もう一度、古事記を開いてみよう。

イザナミ命は「神生み」の最後に迦具土神(カグツチ)を生んだ時、陰部を火傷して。死んでしまう。

妻の死を悲しむイザナギ命が剣でカグツチ神を殺してしまふ。そのとき、飛び散った血肉の各部から「雷神」、「剣神(火を起す)」、また、火のエネルギーを制御する水の霊威(水神・山神)が生まれた。

火の神カグツチは二つの顔がある。ひとつは「恩恵」、もう一つは「脅威」。快適で便利な生活が「恩恵」なら「脅威」も心して考えねば片手落ちも甚だしいこと。

アメリカインディアンホピの予言にある「黒いかたまり」に触れてはならぬという戒律を破って、黒い塊(ウラン)から原子爆弾を作り、原子力という火を点けた。

その火はまだ、半世紀あまりである豊かで便利な暮らしを支えていると言われる原子力の火、背に手に負えない「脅威」という恐ろしい顔はなかなか見せようとはしなかった。

が、隠れていた「脅威」の顔がむき出しになった今。

私たちは火の神をもう一度殺そうとしてはいないか。

「おじいさんのランプ」を読み返しながら、ふと、振り下ろされる「闇」の殺意を覚えた。

青葉の煌めく道を歩いているとき、気持ちは軽やかにはずむように、暗い中で思慮深くなるように、闇の中で感性が研ぎ澄まされるように・・・。

わたしたちは月の夜に螢を放つような無粋なことをしてないだろうか。

星を食べよう

ほんとうだよ、子どもたち

神様は

飛行機のために 空をつくり

観光客のために サンゴ礁をつくり

農業のために 畑をつくり

ダムのために 川をつくり

ゴルフ場のために 森をつくり

スキー場のために 山をつくり

動物園のために けものたちをつくり

交通事故のために 自動車をつくり

幽霊が踊るよう 原子力発電所をつくり

ロボットが踊るよう 人間をつくれた

子供たちよ 大丈夫

井戸は 涸れない

ごらん 夕焼けだ

畑に ひまわり

空に 赤とんぼ

誰かが 歌い出す

星を 食べよう

(昨年、奈良民俗文化研究所の公開講座で新美南吉の「おじいさんのランプ」を取り上げて消えゆくもの、近代化とは？の講演をした。その時、最後にナナオの詩を読んだ。)